

大岡山 課外シンポジウム I

私の考える“理学” “工学”“技学”など



〔はしがき (≡ はじかき)〕

このたびM先生から次のような御依頼をうけました。
“さきの広報室委員会において、下記の題目について
学長の御執筆をお願いすることにしました。私ども
としては、理工学教育に関する学長年来のお考えの
うち、特に創造性に関するセンスの育成について、
大学は何をどうすべきかをお教え願いたいと思ってお
ります。どうぞよろしくお願いいたします。”

題目：「理工系大学における創造性の啓発」

これを拝見して、とっさに思ったことは、“これは私
がお聞きしたいことで、とても他人様にお話しするこ
となど出来ない”ということでした。そこでM先生に
言いました。“この問題について、私は大変関心を持
ってはいますが、私が書けば恥をかくようなもので、
ご遠慮したい”と。ところがM先生曰く。“恥をかく
のは学長の務めの一つでしょう。是非一つ。”とかな
んとかいって、M先生一向に帰ろうとなさらない。“そ
れでは何か書いてみましょう。しかし、とても御期待
にそのようなものは出来そうにありません。私の物が
たたき台になって、本学関係者の創造性啓発の気運が
さらに一層盛り上がるように広報室委員の先生方も御
協力下さい。”ということで a wise man of Gotham
の正体がばれることを覚悟して〇〇をかくことになっ

主 要 記 事

大岡山 課外シンポジウム	1
図書館業務の機械化(その1)	4
各国文学シリーズ(3)	7
人事異動	10
学位(博士)授与者	11
評議会・委員会等構成員一覧	13
昭和49年度就職斡旋事務	14
注目発明の選定	16

学 長 川 上 正 光

てしまいました。

ところで“創造性のないやつがとにかく創造性を書き
たがる”という話を聞いていたからでもありませんが、
話の順序として、まず“理学とは何か”“工学とは何
か”また“Technology とは何か”，この辺をはっきり
しておかないと、ただ創造性といってもどういう創造
性なのか明らかなでないと思うわけです。M先生の御了
解を得て、今回は創造性以前について私の考えを申し
上げてみましょう。

偶然ではありますが、このようなことを郷里出身の
二人の学生(一人は理学部、一人は工学部)が、関西
の大学に行く途中、我家に立寄った際に話し合ったの
で、その会話を思い出しながら、述べることにしまし
ょう。皆様の御高評御叱正を得られれば幸いです。

〔理学(Science)と工学(Engineering)〕

K 田舎の話はそれくらいにして、せっかく今日は
理学と工学の学生さんが集まったのだから、その方面
の話でもしてみましょう。君達も御承知のとおり、現
代社会は、公害、エネルギー危機、高物価、食糧不足、
環境破壊等々が叫ばれ、まことに悲しむべき状態にあ
ります。Bernard Shaw がかつて“太陽系病院”と喝
破したこの病める世界を、光と美に満ちた栄光の新世
界に転ずることは至難の業であります。これをなし
得るものは、真に人類愛に目覚めた科学技術者をおい
て他にはないでしょう。換言すれば、今後の社会——
無公害超工業化社会——を推進する原動力となるもの
は、正に我々理工学の分野の者でなければならないの
ですから、我々の責任は正に重大といわなければなり
ません。

S 私もそう思います。科学の進歩が余りに激しい
ので、科学を科学者にまかせてはおけないという人が
いますが、これはどういうことでしょうね。

K 言いたい人には言わせておけばよいでしょう。ところで君は理学とはどういう学問だと思いますか。

S 理学とは、真理を探究する学問だと思います。

K そのとおりですね。Harvard大学はVeritas(L)(真理)をMottoにしています。大学の目的は真理の探究を第一にすべきだということでしょう。E君、工学というのは、どういう学問でしょうか。

E 工学は理学の成果を応用する学問といってよいでしょうか。理学はどはっきりしないようですが……。

K それでは、その辺を少し説明しておきましょう。真理の探究ということ具体的をいうと、①新事実の発見 ②その新事実がどうして起こるかの認識と法則化 ③その法則による予言、ということです。つまり、Science というのは、一口で言えば“why”の学問です。

このwhyがはっきりすれば、次は自然にこれをseed(種)にして応用してみようということに進むわけです。これが第1種のEngineeringです。換言すれば、このEngineeringは“how”のScienceです。

E 第1種というと、第2種もあるんですか。

K そのことはもう少し後にして、このScienceとEngineeringの区別を、君達の知っていることを例にとって話してみましょう。それには電気磁気学が丁度よい例だと思いますよ。

①Ampèreによる電流の磁気作用の発見とFaradayによる電磁誘導作用の発見(Faradayは真理をかぎつける人といわれた。この発見を聞いた当時の首相Gladstoneは“君の発見は大したものだが、何に应用されるのかな”と聞いたそうだ。Faradayは答えて“生まれたばかりの子供が、どんな人間になるか貴方は分かりますか”と言ったという有名な話がある。)

②Maxwellによって法則化されて、電磁方程式が創られた。

③Maxwellによって電磁波の存在と電磁波は光波と同一であることが予言された。このことがHertzによって実証された。

ここまでがScienceです。この結果をすばやく見てとって無線電信に応用したのがMarconiで、これから先はEngineeringとなるわけです。

E Marconiは一人でもうけたのですか。ところでMarconiは工学的に何かしたのですか。

K Antennaの一端をearthしたこと。L、Cの共振回路を発明したこと。整合回路網を発明したこと。この三つらしいが、何れも実用的には立派なものです。

E 結構よい仕事をしているんですね。この辺で第2種のEngineeringというのを説明して下さい。

K 理学の応用として発達して来たEngineeringは、やがて独立して歩き出し、新しい材料や部品を作り出したり、新しいsystemsを考案したりするようになりました。これらを私が勝手に第2種のEngineeringといったまで、まったく説明の都合上のことです。このことは“以前は物理の木をゆさぶると、何か果実が落ちて来たが、第2次大戦後はさっぱり何も落ちて来ない”などということがあり、逆に産業からの新技術の

要求がはげしいことなどから生じたことですね。ですから、現在のEngineeringというと、まずこの第2種のことをいうのだと承知してよいと思います。TransistorやComputerなどこのEngineeringの成果です。

S 理学というと真理の探究ばかりで、応用を考えては悪いのですか。

K 悪いどころではありません。アメリカのScientistは、新事実を見つけるとすぐに、その応用を考えるといられています。日本の理学部の大方は欧州伝来の方針をまげず、応用を軽視する傾向にあるようです。私は理学で才能を磨いて、工学の魂を持つ人が重要だと思います。これを工魂理才の人といってよいでしょう。真理の探究は勿論結構ですが、それにばかり拘泥して浮世離れしてしまうと“あれは離学だ”といわれるかも知れませんよ。S君は応用も考えるようにして欲しいですね。

S Engineeringの成果を横取りして理学の畑を肥やすように考えようかな!

K それはよい考えです。理学の本領は考え方がinductiveであり、また、analytic development of knowledgeといわれています。これに対して工学はdeductiveであり、またSynthetic development of knowledgeといわれます。お互いの特徴を知り合うことは大切なことです。(analysis, synthesisはギリシャ語でそれぞれ“ばらばらにすること”, “拾い集めること”という意味。)

E どうしてそんな区別が出来たのでしょうか。

K そうなるとよく分かりませんが、personalityによるのではないのでしょうか。Scienceをやる人は知識欲と名誉欲が先に立ち、Engineeringをやる人は、これらの他に創作欲と、あわよくばもうけてやろうかという物欲も加わるのではないのでしょうか。いずれにしても、どうもよい仕事をしている人はこれらの欲も極めて大きいようです。君達も大きな欲を持ちなさい。欲というと聞こえが悪いが、Boys be ambitiousのambitiousですよ。たゞし、常に人類の幸福をお忘れなくということです。いずれにしても、Engineeringのtargetは品物を生産してmake moneyに意味があるわけです。それでengineerには次の三つの階級があるといわれています。

Good engineer → 納期に間に合い儲けを出す。

Poor engineer → 納期に間に合ったが儲けが出ない。

Bad engineer → 納期に間に合わず損をする。

E これはなかなかきびしいですね。肝に銘じておきましょう。

K こういう話もありますよ。理学士は俳句を作ることが出来るが、工学士は俳句を作ろうとすると川柳になってしまうそうです。この気持、今までの説明で分かりましょう。

〔技術(Technology)とは何か〕

E 話のついでに、Technologyとはどういうことか、特にEngineeringとの区別が分かりませんので、

表1 Science, Engineering, Technology の対比

	Science (理 学)	Engineering (工 学)	Technology (技 学)
主目的	真理(Veritas)探究 (自然観の拡大・体系化)	1. 理学の果実の実社会への応用 2. 新材料, 新システム等の考案	文明社会建設推進
主動因	知識欲, 名誉欲 (広義の復讐心)	物欲, 知識欲, 名誉欲, 創作欲 (広義の復讐心)	物欲, 創作欲 (広義の復讐心)
主対象	自然現象および 自然物体	利用しようとする自然現象と物体 人工物体, 人工現象, 人工システム	製造物体
主な仕事	Basic Research (基礎研究)	Strategic Research (計略研究)	1. Tactical Research(実践研究) 2. 設計と企画 3. 製造関係技術の改良など
仕事の条件	1. 時間的に制限がない 2. Payしなくてもよい (無駄, 冗長性を許す)	1. 時間的条件はゆるい 2. Payした方がよい (無駄, 冗長性を排す)	1. 期限がある 2. Payしなければならない (無駄, 冗長性は許されない)

説明して下さいませんか。

K 私も実は長い間、そのことははっきりしないでしたのです。それで、恥も外聞もなく、処々方々で聞きましたよ“求めよ、しからば与えられん”とは良く言ったもので、ついに London で教えられました。それは Manchester 大学の Sir Brian Flowers 教授の“Technology and Man”という講演の中に書いてあるのです。それによるとこういうことです。Science と Engineering は前述のとおり親子の関係というか兄弟関係というか、とにかく親戚である。しかし Technology は、これらとは全く別なことであって、Technology is what to do, whether we are scientists or engineers or housewives. とあります。つまり、Technology というのは作ることなのだということです。ただし、効率よく作るために Scientific methods を用いるのだとあります。

E そうすると、Engineer と Technologist はどういう違いがあるのでしょうか。

K 簡単にいうと、Engineer は学問をしてから物を作る人(先に考えてから歩く人)であり、Technologist は経験をもとにして物を作り、作るために手段として理学や工学の成果を利用して行く人といったらよいと思います。

今こんなことを思い出しました。私の中学時代に、まだ物理学を教わらないうちにラジオを組立て、聞いていた友達がありました。私には、とてもそんなまねは出来ないと思いました。私はまず、原理を理解して、しかる後でなければ、作る気になれなかったのです。この辺が Technologist と Engineer の分かれ道かも知れませんね。

E そうすると Technologist はとにかく作るのが身上ですね。

K そうです。極端にいうと理論的にはっきりしていいようにいまいと作れば良いのですね。いわば病理学

的にはっきりしていなくても、臨床的に病気を治せば良いようなこともあるわけです。これに似たことが数学の方にもありました。参考までに話しておきましょう。処は英国、時は19世紀の末葉、当時の数学は厳密を極め、微分方程式を解くにも、まず解の存在を確かめ、それから厳かに解くといったわけで、この学派を Cambridge Mathematician といった。ところが独学奇才の Oliver Heaviside は、それらとは全く異なった奇抜な Operator 法を創案して、とにかく微分方程式を簡単に解くことを示した。それで Cambridge 学派はそんなインチキな方法を用いるとはけしからんといって、Heaviside に対してごうごうたる非難を浴せかけました。

これに対して Heaviside は次の有名な言葉をもって報いました。

“Shall I refuse my dinner because I do not fully understand the process of digestion?” (意識: 消化過程が完全に分からないからといって俺は夕食を断るものか。逆にいうと消化過程なんか知らなくとも、俺は食うんだ。)

理論的根拠は明確ではなかったが、とにかく Heaviside の方法は実用的に便利重宝なものだったわけです。その後この方法は Laplace 変換と関係があることがわかり、理論的にも裏づけされたが、Heaviside の方法はまさに臨床的だったわけです。

どうしてこんな話をしたかといいますと、Technologist にはこれに似た逞しい精神が必要であることを注意しておきたいからです。

E 大変興味あるお話を伺いました。ところで Technology は日本語で何と言ったら良いのですか。

K Technique は技術だから Technology は技道かな。しかし、日本人は学がお好きなようだから技学としておきましょう。

ここでちょっと、語源を調べてみたから参考までに

書いておきましょう。

理学(Science) → Scientia (L) 知識

工学(Engineering) → ingenious (L) = in +
精巧な の中で
生み出す
gignere

技学(Technology) → technetos (G) 人工の

このように上の二つはラテン語であり、下の一つだけギリシャ語であるというのは、偶然ともいえないような気がしますね。

S おかげさまで、これら三者のことは少し分かってきたような気がします。

K そうそう。何年か前のある授業で、“Engineer とは何ぞ”という問題を出したところ、次のような名答があったことを思い出しましたよ。

理屈は分からなくても作る人 → Technician
理屈は分かっているても手を出さない人 → Scholar
理屈が分かっているても手を出す人 → Engineer

この答案を書いた人は今頃どうしていますかね。

S そいつは Bernard Shaw の日本版ですよ。Shaw は教師を皮肉って次のようなことをいっています。

Who can do, who cannot teach.

つまり“出来る人はやる。出来ない人が教える”と。

K 実行力のない人が教えるか。どうも頂門の一針ですね。

以上述べて来た理学、工学、技学を比較対照して一覧表にしたのが表1です。紙面の都合で説明していない部分もありますが、参考になれば幸いです。

〔欧・米・日の大学における理学、工学、技学の立場〕

K ついでに欧州、アメリカ、日本の大学において理学、工学、技学をどう取扱っているか、概略の話をしておきましょう。

○欧州においては、大学は真理の探究の場とする空

気が強く、工学も技学も大学の中には入れてなかった。そのために、英・仏等は工業生産が立ち遅れたという反省のもとに、近年、工学や技学の格上げを行ないつつある模様である。

○アメリカは、欧州より遅れて大学を建設したにもかかわらず、工学を大学の中に設置したのは卓見であった。これは、アメリカ大陸を開拓するために必要であると考えたのであろう。

ところが第2次大戦後、大学における工学の研究が実際と離れ、Ph.D. を作ることに重点をおき、ますます academic よりになってしまった。そのため生産技術の進歩がおろそかになり、いくつかの製品が日本にひけをとることを自覚し始め、近年、特に Technology の教育を重視するように、方向を転換しつつあるように見受けられる。

○わが国の大学制度は欧州の style をとり入れたとされているが、工学部を大学に設置したことは、まことに幸いであった。

たゞし、大方の理学部は欧州的色彩が強く、応用を軽視するやに聞くが、事実とすれば遺憾にたえない。

なお、理学、工学を通じて、さらに一層独創的な研究成果をあげるよう努力したいものと思う。

技学の学問的基礎は工学・理学であることから、これまで後の二者に関する高度の研究・教育が進められて来たが、技学そのものについても近々大学院まで進みうる道が構えられるに至ったことは欣快にたえない。

S・E もうおいとまする時間になってしまいました。どうもいろいろのお話を伺いましてありがとうございます。我々も今日のお話をもとにして、折にふれ考えてみたいと思います。

K 今日はどうも話を途中で切ってしまって恐縮です。また、続きは今度上京した時にでもしましょう。ではお二人ともお元気で、しっかり勉強して下さい。

図書館業務の機械化(その1)

閲 覧 業 務

附属図書館

目 次

はじめに

I. 閲覧業務

I.1 概 要

I.2 閲覧業務の実際

I.2.1 IDカードの発行

I.2.2 貸 出

I.2.3 返 却

I.2.4 問い合わせ

I.2.5 予 約

I.2.6 督 促

I.2.7 閲覧統計

I.3 閲覧規定の一部改正

I.3.1 貸出冊数と期間

I.3.2 罰 則

I.4 あとがき

はじめに

最近における学術研究の動向についてみると、例えば、宇宙空間科学、海洋開発科学、原子力工学、環境科学等のように、今までの狭い専門分野を越え、多分野にわたる大型研究が社会的要請を背景に現われてきた一方、ますます専門が細分化・高度化していく傾向も又非常に強いことである。これは学術研究の性質上当然のことであろう。更に顕著な動向として研究人口の増加とこれに伴う研究発表量の激増があげられる。

学術研究の成果は必ず研究論文、すなわち学術情報として発表されるものであるが、次にこの学術情報について二、三の特徴をあげてみよう。

第1に、前出の、量的な激増がある。現在全世界で発表される研究論文は、科学技術関係で年間200万件とも300万件ともいわれる。これらの論文を公的に掲載発表する外国の雑誌は、同じく科学技術関係だけをUlrich's International Periodicals Directory. 14ed. 1971/1972およびIrregular Serials and Annuals: an International Directory. 2ed. 1971 から抜き出してみると約3万3千種あり、国内雑誌は、学術雑誌総合目録自然科学和文編1968年(文部省編)についてみると約2万5千種ある。また単行書は、日本の出版年鑑1973年版に約3万点(全分野)を数え、全世界では44万点にのぼっている。

第2に、発表形態や伝達メディアが近年すこぶる複雑・多様化していることである。上述した雑誌と図書については、公的な流通機構にも載り書誌の情報も正確に得られるが、プレプリント、レクチュアノート、テクニカルレポート、会議録、口頭情報等は一般に入手し難いものが多く、所在情報、入手ルートすら明確でないものも数多い。また、伝達メディアも、伝統的な印刷物の他にマイクロフィッシュ、磁気テープ、レコード等非常に多様化してきている。

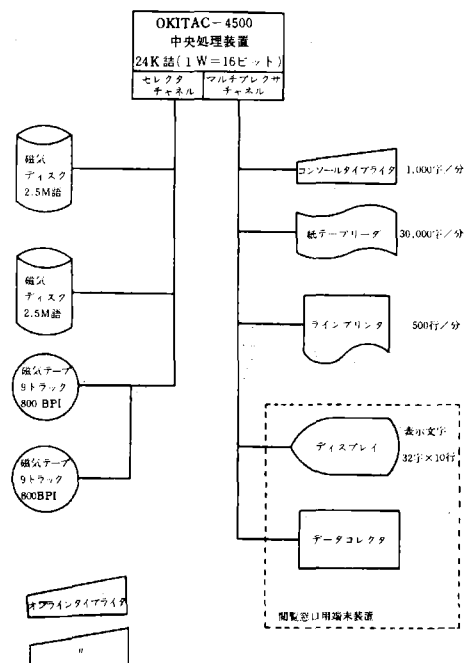
さて、図書館業務の目的は、このような学術情報を効率的に調査、選択、収集、整理し、迅速・的確に必要とする利用者に提供することであるが、現状では遺憾ながらその業務が円滑に行われているとは言えない。また現在の手工業的な処理システムをこのまゝ放置するならば遠からず機能麻痺に陥る危険すらある。その原因は、上述した情報量の激増、発表形態の複雑・多様化と研究人口すなわち図書館利用者の増加が館員の処理能力を大きく上まわっているからである。

このような状況を打開するには、大量情報を高速処理できる電算機を導入する以外方法はないという認識から、本図書館では昨年来、部課長を先頭に館員一同電算化システムについて検討を続けてきた。そして本年5月、電算機の据え付け、調整も終り、1~2ヶ月のテストランを経て、いよいよ7月1日をもって実施稼働の運びとなった。システム構成に当っては、図書、雑誌その他の情報資料の収集から提供に到る全関連業務を処理するトータルシステムを目指すものであるが、図書館業務の複雑性を考え、また、漢字入出力機がないということもあり、当初はメリットのあげ易いもの

から段階的に電算化していくことにしている。

機器構成

電算機はOKITAC 4500(沖電気KK)で構成は次のとおりである。



適用業務

現在までに完成した電算機システムによる業務内容は次のとおりである。

1. 閲覧業務
2. 逐次刊行物の購入、受入・管理、製本、目録
3. 単行書の購入、受入・管理、受入目録
4. 新着速報
5. 予算管理
6. 各種統計

本号では、1の閲覧業務を紹介する。

I. 閲覧業務

I.1. 概要

本図書館が所蔵している図書の利用に関して次の業務をオンラインリアルタイムにより処理する。

1. 貸出
2. 返却
3. 問い合わせ
4. 予約

[5. 督促 6. 閲覧統計] []内はバッチ処理

コンピューター本体は4階電算機室に置かれるが、端末機は1階カウンターに設置される。端末機の種類は、1.データコレクター(写真1の右) 2.ディスプレイ(写真1の左)各1台である。

入力データは、1. IDカード(図1) 2. ブックカード(図2)である。IDカードは利用登録した学生および職員に対して発行され(教官系については部局事務室を通して渡す)、ブックカードは図書のウラ表紙に貼られたポケット内に予め挿入されているものである。

閲覧業務の大部分を占める貸出手続きはIDカード

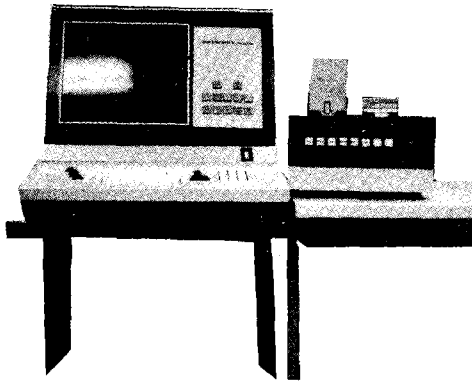
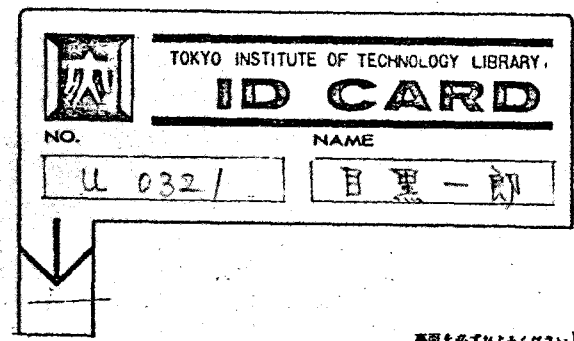


写真1



返却を必ずおこなってください

図1. IDカード

とブックカードを、また、返却手続きはブックカードのみをデータコレクターにセットして処理するが、問い合わせ、予約はディスプレイからのキーインとIDカードの併用で処理する。1件当りの機械的な処理時間はほんの数秒である(実験段階での試算では3秒)

従来の手続方法は利用者にとっても図書館側にとっても時間と労力の点で大きな負担となっていたが、今後はより有益なサービス面にエネルギー変換できるであろう。

I. 2 閲覧業務の実際

I. 2. 1 IDカードの発行

IDカードの発行は登録制である。1階カウンターに置かれた登録証に所要事項を記入し申し込む。なお、本年度は、すでに旧システムで登録済みの利用者については記入する必要はなく、住所等の確認のみでよい。

IDカードはプラスチック製で入力用に用いるものであり、学生は在学中、職員は在職中有効であるから取扱いには充分気を付けねばならない。万一破損もしくは紛失して再発行を求める場合は直ちに届け出て所定の手続きをとる。また、住所が変更した場合も直ちに届け出て登録証の住所欄を訂正しなければならない。

I. 2. 2 貸出

利用者が貸出する図書とIDカードをカウンターに提出すると、担当者はブックポケットからブックカードを抜き出し、それとIDカードとをデータコレクターにセットする。貸出処理が終了すると担当者は再びブックポケットにブックカードを収め、デットスリップ(返却期限を明示した表)に日付を捺印し、図書とIDカードを利用者に渡す。それが作業のすべてである。

機械の内部処理としては、まず貸出ファイル(磁気ディスク)中にあるその利用者の貸出冊数、貸出中図書のブックコード(分類番号、著者記号、和書・洋書・指定図書の区分、登録番号)、返却期限等の記録をチェックし(この記録もすべてディスプレイに表示される)、貸出冊数、返却期限が規定通りならばそのまま貸出ファイルに記憶されるが、もし冊数か期限が規定に違反していれば貸出不可のメッセージがディスプ

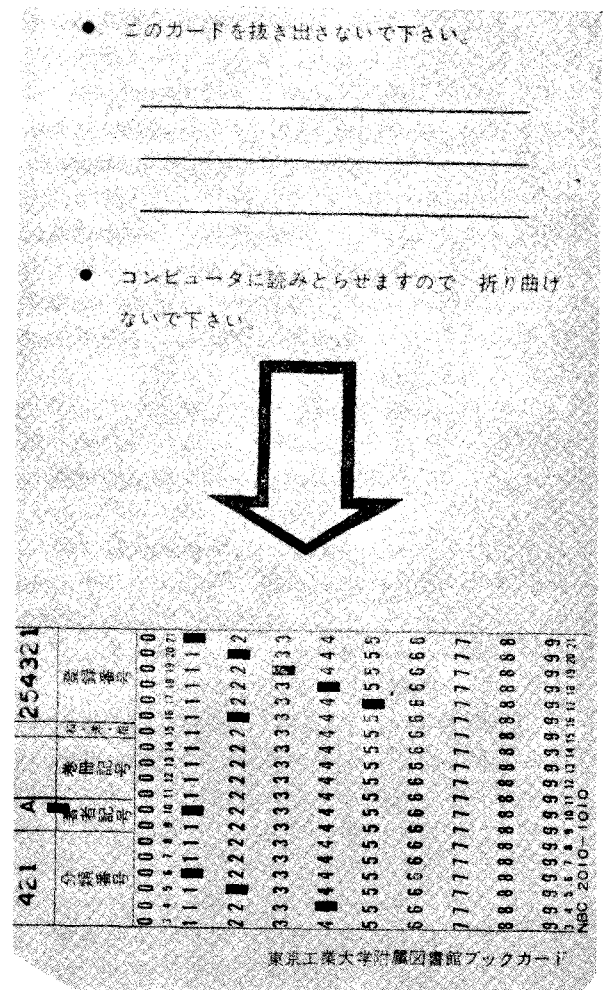


図2. ブックカード

レイに表示され、貸出手続はとれない。

なお、電算機により貸出処理する図書は、一般単行書、指定図書(いずれも1階書架)に限り、雑誌、辞書、事典、便覧類は対象としていない。

I. 2. 3 返却

返却処理にはブックカードのみを入力し、IDカードは使わない。従って利用者は、利用後の図書を1階カウンターか玄関脇の返却ポストに戻しておくだけでよい。

機械の内部処理としては、貸出ファイルにあるその利用者の記録の中から返却図書の記録を抹消する。ただしその図書に予約がある場合はその旨ディスプレイに表示されるので、担当者は予約者に通知し、貸出に來るまで保管する（保管日数は通知後1週間）。予約がなければ図書は所定の書架に戻される。

I. 2. 4 問い合わせ

問い合わせには2種類ある。1は、図書の貸出状況に関する問い合わせである。必要とする図書が書架上にない時、目録カード検索によりブックコード（分類番号、著者記号、登録番号）を調べ、ディスプレイからキーインすれば、貸出中の利用者のIDコード、返却期限が表示される。その2は、利用者の貸出状況に関する問い合わせである。ある利用者が何を貸出しているかを知りたい時、ディスプレイからIDコードをキーインするもしくはデータコレクターにIDカードをセットすることによって、貸出中図書のブックコード、返却期限などが表示される。

I. 2. 5 予約

予約をするには、前記問い合わせによって貸出状況を先ず確認しなければならない。単に書架排列の乱れとか館内閲覧中があるからである。手続は、予約者のIDカードをデータコレクターにセットし、ディスプレイからブックコードをキーインする。機械の内部処理としては、デスク上の貸出ファイルに予約者のIDコードとブックコード、予約期限（返却期限+1週間）を記憶させる。

予約すれば、返却の際直ちに通知され、予約期限までカウンターに保管されるが、期限を過ぎても借り出しに來なければ図書は所定の書架に戻され一般の閲覧に供される。

I. 2. 6 督促

図書は全学の共有財産であるから個人の書齋に死蔵

されてはならない。従って返却期限を超過した利用者に対しては速やかに返却するよう督促状を発送する。貸出ファイルから期限超過分を取り出し、利用者ファイル（登録証をもとに利用者の氏名、住所等を記録した磁気テープ）と付き合わせ、葉書のフォーマットで出力する。これは適宜バッチ処理する。

I. 2. 7 閲覧統計

図書の貸出状況を把握することは、蔵書構成等サービス面のプランをたてるのに必要である。閲覧関係の統計としては、分類別貸出、分類別・身分別貸出、図書別貸出、ベストリーディング統計などで、月次、年次でバッチ処理する。

I. 3 閲覧規定の一部改正

電算化システムに伴い、閲覧規定に若干の改正があるのでお知らせする。

I. 3. 1 貸出冊数と期間

学部学生	5冊	2週間	(5冊 10日)
大学院学生	10冊	4週間	(10冊 1ヶ月)
教職員	10冊	4週間	(10冊 1ヶ月)
(名誉教授を含む)			() 内 旧規定

I. 3. 2 罰則

超過日数と同じ日数を貸出停止期間とする（1日超過すれば1日、2日超過すれば2日貸出を停止する。また複数の貸出図書のうち、1冊でも期限を超過していればこの規定が適用される。）

I. 4 あとがき

電算機による本閲覧業務は7月1日をもって実施する予定である。貸出、返却手続の簡略・迅速・正確化、問い合わせ、予約のサービスなど、その便利さは図書館にとっても利用者各位にとっても大きく評価できよう。

各国文学シリーズ(3)ドイツ編

ゲオルク・ハイムの世界



ゲオルク・ハイムは1887年に生まれ、1913年に歿した。同年生まれで同じく短命な生涯を終ったゲオルク・トラークルと並んでドイツ表現主義派の代表的詩人として有名である。百科辞典に代表される世間一般の評価はその抒情詩の分野におおむね力点が置かれているが、ハイムを考える際に見逃がされ

てならないのは、7篇の短い小品を集めた「泥棒」と称する短篇集である。この散文作品によってハイムは、幾多の表現主義の詩人たちのなかでも、とりわけ特異な光芒を放っているといわなければならない。これらの7篇の作品において、執拗にハイムは、死を、革命を、殺戮を、悪夢を、病人を、狂人を描いた。その世界は反抗と絶望と狂気とに彩られた漆黒の幻想、生の影である。偏執的ともいえる、生の裏面への執着が彼の散文作品を、ひいてはその全文学を規定している。

この短篇集から「狂人」と題された一篇の一部を例に挙げてみよう。主人公は精神病院を退院したばかりの男で、退院直後の一連の狂的な行動に焦点が当てられている。病院を出た男は、戸外で遊んでいる子供たちを見て突如として獣性をあらわし、白日のもとに次のような光景がくりひろげられる。

「突然男は跳び上ると、子供たちのあとを追った。子供たちは足音を聞くと、叫び声を上げはじめ、いっそう速く駆けた。少年は妹を引っぱっていった。妹はつ

まづき、倒れ、泣き出した。

「そして泣くのは、男にはまったく耐え難いことだったのだ。

「男は子供たちに追いついて、少女を砂から引きあげた。少女は自分の上に迫る歪んだ顔を見て 大声で叫んだ。少年も叫んで、逃げようとした。そこで男は少年を片手でつかまえた。男は両方の子供たちの頭を互いにぶっつけた。1, 2, 3, 1, 2, 3と男は数えた。そして3で、2つの小さな頭蓋は、本物の雷のように、音をたてて砕けた。早くも血が流れ出した。血が男を酔わせ、男を一個の神とした。男は歌わざるを得なかった。男は一つの讚美歌を思いついた。そこで男は歌った。

『かみはわがやぐら／わがつよきたて／くるしめるときの／ちかきたすけぞ／おのがちから／おのがちえを／たのみとせる／よみのおさぞ／げにおぞましき』
「男は一拍子ずつ声高かにアクセントをつけた。そして各拍子ごとに、シンバルを叩き合わせる楽士のように、両方の小さな頭蓋をぶっつけあわせた。

「讚美歌が終ると、男は両方の砕けた頭蓋を手から落とした。男はまるで恍惚状態にあるかのように、二つの屍体のまわりを踊りまわった。踊りながら両腕を大きな鳥のように振った。すると腕についた血が、火の雨のように自分のまわりに飛び散った。

これは「げにおぞましき」光景かもしれない。無辜の幼児たちに対して加えられる血腥い行為は奇怪であり、陰惨である。しかし砕け割れる幼児の頭蓋、流れ出す血だけが凄惨さを惹き起こすのではない。われわれにとっていっそう無気味なのは、あたかも習熟しきった儀式を司るかのように、拍子をとって生命の殺戮を続ける男の平然とした、括弧たる、さらにまた嬉々とした態度そのものである。しかも彼は讚美歌をその犯罪の伴奏にするのだ。さらにつけ加えるならば、この場面を叙述する単調な、短い、抑制された文章の連続が、この無気味さを倍加している。

ところで「無気味」とは何なのか。不安や恐怖を喚び起こすこの「無気味なもの」の概念については、フロイトの行なった詳細な考察が有名である。フロイトは「親しい(heimlich)」という形容詞と、それから派生した、反対語をあらわす接頭語(un)を付した「無気味な(unheimlich)」とが、通常考えられるような単なる対立関係にあるのではなく、heimlichなる語の有する一種の双価性のゆえに、結局は両者が合致するものであることを剔抉し、「前綴 un は抑圧の刻印である」と結論する。すなわち、無気味なものとは、一度抑圧を経て再びもどってきた「昔なじみの」「馴れ親しんだもの」であるわけである。無気味さを惹起する根源となるものは、日常茶飯の現象界の皮下領域に遍在的に常時棲息しているのだ。そして親しいものと無気味なものとの類縁性とは、ひいては世界の秩序と混沌と

の、精神の神と悪魔との、意識の光と闇との、人間の理性と獣性との、正気と狂気との、わかり難く結びついた親近性の謂ではあるまいか。幻想、怪奇の文学や芸術が、古来その妖しい、黒い華を開花させ続けている事実も、それらの親縁性の証左であろう。

ハイムの精神のなかには夜の蔭の住人たちに対する偏執的な愛好の姿勢があったことは、日記も証明する事実である。その代表的な一例は次のような一節である。「私は、自己のなかに引裂かれた心を持つ者たちをすべて愛する。私はクライストを、グラッペを、ヘルダーリンを、ビュヒナーを愛する。私はランボーを、マローを愛する。私は大勢の人々に崇拜されないすべての者たちを愛する。私はほとんど毎日私自身絶望しているように、しばしば自己に絶望する人々をすべて愛する。」(1909年7月20日)

前記の4人のドイツの詩人たちだけをとってみても、いずれも18・19世紀ドイツ文学のアウトサイダーたちであった。芸術獲得のために現実の生を犠牲にせざるを得なかった、いわば実人生の異端者たちであった。それぞれの資質や構築された文学の世界は、むしろ独自の本性をあらわしてはいるものの、共通分母は、虚無を貫く異常な緊張度とでもよばれるものであろうか。ハイムの奥部には、そこに共鳴するものがあつたのではなからうか。

怪奇な物語を極度に劇的緊密度の漲った文体に圧縮している短篇「ロカルノの女乞食」、復讐の徹底性を執拗に追求した「ミヒャエル・コールハース」の作者ハインリヒ・フォン・クライストは34歳で自殺した。

また「ヒュペーリオン」のなかで、「私の説は辛辣に失するようではあるが、しかしそれが真相である以上、どうしてもいわずにはいられない。私はドイツ人よりもっと分裂的な国民を想像することはできない。職人はいるが、人間はいない。思想家はいるが、人間はいない。僧侶ならいるが、人間はいない。主人と奴僕、少年と壮年者はいるが、人間はいない——それはあたかも手や腕やその他の肢体がばらばらに散在し、一方、流血砂にまみれる戦場の如くではないか」と、18世紀末にドイツとドイツ人に仮借ない言葉をたたきつけたフリードリヒ・ヘルダーリンは、その直後から36年間にわたって精神錯乱の薄明に身を沈めるといって、悲劇の生涯を送った。

ゲーテ対クライスト、シラー対ヘルダーリンとの精神的相克はドイツ文学史上で著名な事実で、ドイツ文学の黄金期の詩人たちは現実に互いに邂逅の機会にも恵まれたわけではあるが、天才間に醸成されたのは、たとえばゲーテ・シラー間にあるような調和、同調という正の現象ではなく、反撥、違和の宿命的関係である。敗れて、傷手を負い、後退したのは年少のクライストであり、ヘルダーリンであった。

ゲーテという光源に飛び込んで、魂を焼きつくし、

消滅した天才詩人にヤーコプ・ミヒャエル・レンツがいるが、モスクワの路上で凍死したこの狂気の詩人を題材にして「レンツ」を書いたのが、ゲオルク・ビュヒナーである。彼はまた「ひとりの偉大な文学者によって記録された、時代の敗者としての一精神病者の症歴でなくてなんであらうか」と評される「ヴォイツェック」断片を遺した。ビュヒナーは23歳で夭折した。

異常な悲劇的生涯を35年で閉じたクリスティアン・ディートリヒ・グウッペについて、ハイムは日記の別の個所に、「私はヘルダーリンに並ぶ一人の新しい聖者を、かの素晴らしきグラッペを持っているのだ。『頭には鷲、泥濘に足』」と記している。グラッペの「ドン・ジュアンとファウスト」は古典的人間の破壊作業に他ならない。ハイム自身がゲーテに反抗的であったことは日記の方々に散見される通りである。

一方では、ドイツ文学の一特質たる教養小説の系列の跡づけという正道をたどるのが、十分に意義をそなえた課題であるならば、他方で、また夜の側に位置する文学の流れ、あるいはまた隠れた地下の脈を探り出す、一見変則的な伝統の史的展望も決して無意義な作業とはいえない。確かに「いろいろな『系譜』を組み立てることによって、あたかも文学史上の新しい事実が証明されるかに思ひこむのは、一種の錯覚にすぎない」であろうが、堅固な視点を設定し、恣意性を排除して出発するならば、文学史における精神的系譜の構成は決して「まったく無益のこと」には終わらないのではあるまいか。グスタフ・ルネ・ホッケ（「文学におけるマニエリスム——言語＝錬金術と秘教的結合技術」）や、ヴォルフガング・カイザー（「絵画と文学における奇怪なもの」）等々の諸業績は引合いに出すまでもあるまい。フリッツ・シュトリヒなどの説くような、古典対浪漫という様式的対立とはまた異なる基軸上での、たとえば円熟的古典と相対立する一連の流れの追尋、すなわち文学史上におけるいわば負記号のついた精神的系譜をたどること、それによって人間精神の正の領域の裏面に存在する不可解な闇の分野を照射する仕事は、人間の精神構造の全貌を解明し、検討するための有力な手がかりをわれわれに与えてくれるものと思われる。24歳でスケート中に溺死したハイムの文学自体の持つ意義と特質は、そのような問題と契機を提起し、示唆するかのようである。

（工学部一般教育等ドイツ語助教授 野田 倬）



学生相談室を

去るにあたって

前学生相談室長 中村正久

学生相談室長という名前をいただいてから、何とか5年近く勤めさせていただきましたが、昨年から材料科学専攻設立の世話役をつとめさせられる破目になり、にわかに身辺が多忙になってきたため、3月末で相談室を退かせていただくことになりました。真面目に勤めあげたとは決して申せませんでしたので、あまり長くは感じませんでしたが、どうか勤めさせていただいたのは、関係者の皆様の温いお心づかいのおかげであります。

学生相談という仕事の内容は今年で2回目の報告書を書きましたのでそちらへゆずらせていただくことにしますが、一度学生相談見学会というのに参加したことと、他大学の相談室の見学を何回かしたこととが印象として残っています。他の大学に比較して本学が学生諸君のために恵まれた施設が整っているようには決して思えませんが、雰囲気としては恵まれているように思われました。それは何ととっても東京工大の先生方は学生を大事に扱っているということです。相談事項があって訪ねれば、先生方は在室されている限り必ず会って親切に疑問に答えて下さることが何よりも有難いことであると考えます。学生相談の主旨は、学生一人一人の才能を可能な限り伸ばしてやるようにすべきものと声を大きくして説いた講演を聞いたりしますと、何だそんなことならば東工大ではあたりまえのこととさえいいなくなったものです。私自身が適切な助言者でなくても、必ず何人かのより適切な方をさがし出すことができますし、お願いすれば必ずよい助言がしていただけますのはほんとうに有難いことです。もしかすると先生方には大変ご迷惑をかけたかも知れませんが、有難かったということは、助言していただいた学生には必ずわかる時が来るものと思っています。

適切な助言を得るという意味では、学生相談室は学生諸君にまだまだたくさん利用されてよいものと思います。相談件数もまだそんなに多くありませんし、学生諸君は相談室を通してもっと積極的に先生方の助言を得るべきだと思います。先生方はそんなにたやすく現在の席を得たわけではありませんし、かなりの苦勞をされておられるわけですから、必ずや何か得るものがあるはずであります。どうか相談室を有効に利用していただきたいと思います。

本学に学生相談室を作って下さった加藤前学長をはじめ稲野前事務局長、補佐員の採用に骨を折って下さった芳賀前人事課長など多くの方々のご好意を感謝いたします。また、至らぬ私をお助けいただいた歴代の委員、相談員の先生方はじめお手伝いいただいた事務局の方々に厚く御礼申し上げます。

（工学部共通講座材料強度 教授）

- 堀池真琴：理博第230号（49. 3. 26）
 ^{51}V に於ける非弾性電子散乱と有効電荷
- 松田正敏：理博第231号（49. 3. 26）
 KMnF_3 の構造的相転移における超音波分散
- 岡 宏一：理博第232号（49. 3. 26）
 77°K_3 -メチルヘキサン剛性マトリックス中の捕捉電子のESRと脱捕捉電子の挙動
- 川嶋良章：理博第233号（49. 3. 26）
 フェルミ共鳴とコリオリ共鳴の共存する系での回転スペクトルの研究
- 高橋千晴：理博第234号（49. 3. 26）
 芳香族炭化水素負イオンの共鳴ラマン効果
- 田口武夫：理博第235号（49. 3. 26）
 アミド類を用いる新しい合成反応の研究ピオチンの新合成法
- 野宮健司：理博第236号（49. 3. 26）
 The Reaction of Water with Free and Coordinated Carbonyls in Some Small Biomolecules.
- 原 宏：理博第237号（49. 3. 26）
 VUV Photolysis of Ethylene in the Gas Phase
- 田中健一郎：理博第238号（49. 3. 26）
 The Study of Photoionization of Simple Molecules with Mass Spectrometric and Photoelectron Spectroscopic Methods
- 牧野 洋：理博第239号（49. 3. 26）
 アスパラギナーゼの構造と機能に関する研究
- 秋葉光徳：理博第240号（49. 3. 26）
 ^{26}Al の核磁気モーメント
- 瀬川秀夫：理博第241号（49. 3. 36）
 高周波伝導および光伝導測定による非晶質半導体の研究
- 深谷俊夫：理博第242号（49. 3. 26）
 スペックル・ランダム・パターンの特性とその応用に関する研究
- 佐々木 彰：理博第243号（49. 3. 26）
 アントラセン単結晶の光物性に対する塑性変形の効果
- 丸山忠司：理博第244号（49. 3. 26）
 高圧下における固体中の超音波伝播に関する研究
- 工学博士
 肥後矢吉：工博第414号（49. 3. 26）
 オーステナイトステンレス鋼単結晶のマルテンサイト変態と塑性変形
- 松尾 孝：工博第415号（49. 3. 26）
 $18\text{Cr}-8\text{Ni}$ オーステナイト耐熱鋼の高温強度改善に関する研究——主として炭化物析出による強化と置換型固溶元素による強化

学 位（博 士） 授 与 者

昭和48年4月1日から昭和49年3月31日までの間に、本学で学位（博士）を授与された者は132名（理学博士32名，工学博士100名）であった。大学院博士課程修了による者78名（理学博士24名，工学博士54名），論文提出による者54名（理学博士8名，工学博士46名）であるが，昭和49年2月までに授与された者については本誌で随時掲載して来たので，今回は3月26日付けで授与された者についてのみ掲載することにした。

授与者氏名，学位記番号，授与年月日，学位論文題目は次のとおりである。

〔課程修了によるもの〕

理学博士

高野清治：理博第227号（49. 3. 26）.

Information Stability and Interaction
 Information

蛭田幸太郎：理博第228号（49. 3. 26）

超鉛領域核の α 崩壊の研究

山田 聡：理博第229号（49. 3. 26）

反跳Naのエネルギー損失と ^{22}Na の励起状態の寿命測定

- 石井友之：工博第416号 (49. 3. 26)
オーステナイト鋼の高温強度における強炭化物形成元素 (Ti, Nb および V) の機能に関する研究
- 板谷 宏：工博第417号 (49. 3. 26)
高炉内のガス反応に関する速度論的研究
- グエン・アン・チュン：工博第418号 (49. 3. 26)
The Formation of Morphologies of Freezing Interface in Aluminum and Aluminum Alloys.
- 大野 亮：工博第419号 (49. 3. 26)
ゴムの伸張挙動の構造的な研究
- 島崎恒蔵：工博第420号 (49. 3. 26)
溶融紡糸過程における熱伝達とポリプロピレン繊維の冷却効果について
- 溝口徹也：工博第421号 (49. 3. 26)
無定形高分子の体積粘弾性に関する研究
- 赤石 實：工博第422号 (49. 3. 26)
Pressure Effect of the Various Phase Transformations in Binary Systems
- 安斉和雄：工博第423号 (49. 3. 26)
 $\text{TiO}_2 - \text{Cr}_2\text{O}_3$ 系焼結体の基礎的研究
- 磯貝 純：工博第424号 (49. 3. 26)
セメント硬化体と海水成分との相互作用に関する基礎研究
- 鎌田喜一郎：工博第425号 (49. 3. 26)
常磁性イオンを含むペロブスカイト型酸化物の合成と電気的・磁気的性質の予測
- 荘司 顯：工博第426号 (49. 3. 26)
合成ポリペプチドの溶液中のコンホメーション
- 高橋洋之介：工博第427号 (49. 3. 26)
光発色性スピロピランの消色過程
- 中山景次：工博第428号 (49. 3. 26)
化学摩耗の機構に関する研究
- 直木基祐：工博第429号 (49. 3. 26)
Thermodynamic Theory on Flat Systems in Rheological Phenomena
- 平谷和久：工博第430号 (49. 3. 26)
ジチオカルバメートおよびその誘導体の合成と反応に関する研究
- 洲上寿雄：工博第431号 (49. 3. 26)
シアナミド系 N-クロロ化合物の合成的研究
- 宮村雅隆：工博第432号 (49. 3. 26)
二酸化炭素固定化酵素およびそのモデル化に関する研究
- 山崎陽太郎：工博第433号 (49. 3. 26)
ニオブ酸リチウム単結晶の育成とその電気光学メモリ特性
- 山辺常吉：工博第434号 (49. 3. 26)
担持パラジウム触媒の水素吸着特性と水素化反応活性
- 小島博光：工博第435号 (49. 3. 26)
流下液膜による反応吸収
- 金子堅司：工博第436号 (49. 3. 26)
種々の前負荷後における塑性変形挙動の研究
- 田中忠良：工博第437号 (49. 3. 26)
蒸発現象の基礎的研究
- 横田克彦：工博第438号 (49. 3. 26)
ディーゼル機関の燃料噴射と混合気形成に関する研究
- 渡辺健彦：工博第439号 (49. 3. 26)
溶接熱影響部における粒界液化割れに関する研究
- 相内 進：工博第440号 (49. 3. 26)
不規則荷重を受ける歯車の歯の曲げ疲れ強さ
- 小林重信：工博第441号 (49. 3. 26)
Optimal Design of Homogeneous Physical Flow Systems
- 米山喜久治：工博第442号 (49. 3. 26)
鉄鋼業における技術革新と職場管理
- 西山明彦：工博第443号 (49. 3. 26)
並列鉄共振型定電圧装置の研究
- 伊藤隆司：工博第444号 (49. 3. 26)
CaAs-MIS 構造の解析と電子素子への応用に関する研究
- 遠藤信行：工博第445号 (49. 3. 26)
電子走査式超音波診断装置の基礎研究
- 太田忠久：工博第446号 (49. 3. 26)
Investigations on Physical Properties of ZnTe Heterojunctions
- 鹿子嶋憲一：工博第447号 (49. 3. 26)
円形ループアンテナとそれを用いたアレイアンテナの研究
- 鈴木嘉彦：工博第448号 (49. 3. 26)
2次非線形系の力学系対応による解析法
- 本杉常治：工博第449号 (49. 3. 26)
音響・電気ドメインを用いた光偏向装置に関する基礎研究
- 渡辺弘道：工博第450号 (49. 3. 26)
増幅器の周波数特性が能動 RC フィルタにおよぼす影響に関する研究
- 稲村 肇：工博第451号 (49. 3. 26)
地域住民の反応と路線選定
- 小西敏正：工博第452号 (49. 3. 26)
建築物の部位・部材間の隙間における漏音の性状とその防止に関する基礎的研究

石黒慎一：工博第453号（49. 3. 26）

水溶液ならびに陽イオン交換樹脂中のウランフッ素錯体の研究

（大学院博士課程修了による学位授与についての申合せ）B項適用

下河辺 明：工博第454号（49. 3. 26）

ウォームギヤの相対曲率に関する研究

中田 毅：工博第455号（49. 3. 26）

パルス幅変調法とそのサーボ弁への応用

森下清子：工博第456号（49. 3. 26）

水平オープン・ジョイントの防雨設計に関する基礎的研究

評議会・委員会等構成員一覧

◎印 委員長, ○印 副委員長		
評議会	部局長会議	教育委員会
学長 川上 正光	学長 川上 正光	◎教授 谷崎 義衛
理学部長	理学部長	○" 富田 幸雄
岡田 利弘	岡田 利弘	" 小松 和蔵
教授 田中 郁三	工学部長	" 野村昭一郎
" 沢田 正三	清家 清	" 松井 昌幸
工学部長	資源研究所長	" 尾崎 萃
清家 清	池田 朔次	" 青木 成文
教授 慶伊 富長	精研所長	" 高木 ミエ
教授 益子 正巳	福与 人八	" 雨宮 一郎
資源研所長	工材研所長	" 西岡 篤夫
池田 朔次	齊藤 進六	助教授河合 光路
精研所長	原子炉研所長	" 木村 泉
福与 人八	垣花 秀武	" 清水 二郎
工材研所長	附属図書館長	" 藤江 学
齊藤 進六	本庄 五郎	" 松島 皓三
原子炉研所長	教務部長	" 今井 久雄
垣花 秀武	岡崎 光雄	" 八木 誠一
-----	事務局長	" 穠山 貞登
附属図書館長	齊藤寛治郎	" 久世 栄一
本庄 五郎		教務部長 岡崎 光雄
教務部長		（幹事）
岡崎 光雄		教務部次長
事務局長		大原 壽仲
齊藤寛治郎		教務課長 川代 重富
		理学部事務長
		長岡 伸章
		工学部事務長
		大森 義保

施設委員会	研究委員会	大学院委員会
◎教授 向山 光昭	◎教授 白井 隆	◎教授 向 正夫
○" 染野 檀	○" 境野 照雄	○" 宮入 庄太
" 桜井 俊男	" 市村 浩	" 石原 繁

教授 阿武 芳朗	教授 安盛 岩雄	教授 福田 博
" 末松 安晴	" 森村 英典	" 桂 敬
" 馬場 宏	" 松田 博明	" 久武 和夫
" 山本 明夫	" 飯島 泰蔵	" 国澤 清典
" 佐多 敏之	" 日野 幹雄	" 田中 良平
" 織田 暢夫	" 平井 正	" 石川 欣造
" 平本 幸男	" 池辺 洋	" 伊藤 四郎
" 宮入 庄太	" 浜野 健也	" 中原 一郎
助教授 菅野 恒雄	" 高島 洋一	" 阿武 芳朗
" 武谷 汎	助教授 坂田 勝	" 白鳥 英亮
" 山田 圭一	（幹事）	" 真壁 肇
" 大塚 二郎	研究協力課長	" 日野 幹雄
教務部長	引地 章	" 平井 聖
岡崎 光雄		" 鈴木 光男
事務局長		" 山室 信弘
齊藤寛治郎		" 田幸 敏治
（幹事）		" 小林 啓美
経理部長木下四郎		" 吉本 勇
施設部長片山恂一		" 中村 正久
理学部事務長		" 池辺 潤
長岡 伸章		" 明島 高司
工学部事務長		助教授 中野 和夫
大森 義保		" 野田 倬
		教務部長 岡崎光雄
		（幹事）
		教務部次長
		大原 壽仲
		教務課長 川代重富

厚生補導委員会	共通科目教官 会議常任委員会	図書館委員会
◎教授 辻 茂	◎教授 大西 孝之	◎館長 本庄 五郎
○ 助教授 松尾 禎士	○" 吉田 夏彦	教授 石本 新
教授 岩田 慶治	" 井上 謙蔵	" 山口昌一郎
" 安倍 勇	" 高木 ミエ	" 吉本 勇
" 笠井 俊保	" 森 雄次	" 高橋 恒夫
" 田村 章義	" 篠原 一男	" 山本 明夫
" 矢島 釣次	" 平井 正	助教授 野宗 嘉明
助教授 河村 一知	" 石田 俊丸	" 早川 一也
" 後藤 和弘	助教授 丸山 滋弥	" 出淵 博
" 黒澤 一清	" 福田 豊彦	" 新井 栄一
" 早川 一也	" 小坂 丈子	" 西本 敏彦
" 山崎 升	教務部長 岡崎光雄	" 三宅 哲
" 当麻 喜弘	（幹事）	" 佐藤 正雄
" 永田 一清	教務部次長	" 梅谷 陽二
" 藤江 学	大原 壽仲	" 阿部 光雄
教務部長 岡崎光雄	教務課長 川代重富	" 中村 哲朗
（幹事）		（幹事）
教務部次長		事務部長 藤井和夫
大原 壽仲		整理課長 井上康博
教務課長 川代重富		閲覧課長 片岡利正
厚生課長 北田 務		
理学部事務長		
長岡 伸章		
工学部事務長		
大森 義保		

放射線障害
予防委員会

◎原子炉研所長
垣花 秀武
教授 小田 幸康
" 飯島 俊郎
" 野村昭一郎
" 織田 暢夫
" 岩井 津一
" 長倉 繁磨
" 久武 和夫
助教授 篠野 嘉彦
" 曾我 和雄
保健管理センター
所長 大木 保男
事務局長
齊藤寛治郎
(幹事)
研究協力課長
引地 章

保健管理センター
運営委員会

◎所長 大木 保雄
教授 大戸敬二郎
" 染野 檀
助教授 吹田 信之
" 曾我 和雄
" (学位)
松野 尚夫
学生相談室長
平井 聖
教務部長
岡崎 光雄
事務局長
齊藤寛治郎

情報処理センター
運営委員会

◎センター長
堀江 久
教授 笹田 義夫
" 飯島 泰蔵
" 加藤 誠軌
" 長谷川健介
" 石本 新
" 明畠 高司
" 池辺 潤
" 岩井 津一
助教授 佐藤 伸
" 小林孝次郎
" 中村 英夫
" 中条利一郎
" 新井 栄一
附属図書館長
本庄 五郎
教務部長 岡崎光雄
事務局長
齊藤寛治郎
(幹事)
研究協力課長
引地 章

(幹事)
工学部事務長
大森 義保

(幹事)
庶務課長
齊藤正太郎

交通安全対策委員会

◎教授 佐藤 實
○ " 丹生慶四郎
" 栗野 満
" 梅川 莊吉
" 福富 博
助教授 鈴木 敏郎
教務部長
岡崎 光雄
事務局長
齊藤寛治郎
経理部長
木下 四郎
(幹事)
主計課長
樋口 敬治
経理課長
渋谷健三郎
教務課長
川代 重富

昭和49年度

学科主任会議構成員

(理学部)
数 学 科 教授 平沢 義一
物 理 学 科 " 市村 浩
化 学 科 " 須藤 六郎
応用物理学科 " 栗野 満
情報科学科 " 梅垣 寿春
天然物化学
研究施設 " 坂上 良男
評 議 員 " 沢田 正三
評 議 員 " 田中 郁三
(工学部)
金属工学科 教授 春山 志郎
有機材料工学科 " 砺波 宏明
無機材料工学科 " 加藤 誠軌
化学工学科 " 寺沢 誠司
高分子工学科 " 加倉井敏夫
機械工学科 " 小川 潔
生産機械工学科 " 佐藤 和郎
機械物理工学科 " 臼井 英治
制御工学科 " 森 政弘
経営工学科 " 小林 靖雄
電気電子工学科 " 飯島 泰蔵
電子物理工学科 " 酒井 善雄
情報工学科 " 榎本 肇
土木工学科 " 吉川 秀夫
建 築 学 科 " 吉岡 丹
社会工学科 " 阿部 統
教 育 群 " 坂元 昂
人文社会群 " 道家 達将
外 国 語 群 助教授 入沢 康夫
保健体育群 教授 大木 保男
像情報工学
研究施設 " 井上 英一
評 議 員 " 慶伊 富長
評 議 員 " 益子 正巳

教育工学開発セン
ター運営委員会

◎所長 末武 国弘
理学部長
岡田 利弘
工学部長
清家 清
附属図書館長
本庄 五郎
附属工業高等学校
長 大戸敬二郎
教務部長
岡崎 光雄
事務局長
齊藤寛治郎
教授 富田 幸雄
" 市村 浩
" 吉本 勇
" 坂元 昂
" 宮本 陽吉
" 森 政弘
" 武者 利光
" 平井 聖
助教授 稲田 祐二
" 後藤 和弘
" 小野 嘉夫
センター教授(併)
太田 次郎
センター助教授
清水 康敬

長津田地区利用委員会

○理学部長
岡田 利弘
工学部長
清家 清
資源研所長
池田 朔次
精研所長
福与 人八
工材研所長
齊藤 進六
原子炉研所長
垣花 秀武
附属図書館長
本庄 五郎
天然物化学研究
施設長 坂上 良男
像情報工学研究
施設長 井上 英一
教務部長
岡崎 光雄
教授 久武 和夫
" 桂 敬
" 浅枝 敏夫
" 西巻 正郎
" 森 康夫
" 慶伊 富長
" 伊藤 四郎
" 中村 正久
教授 明畠 高司
" 大河原 信
" 山本 晃
" 森 栄司
" 浜野 健也
" 龍谷 光三
" 鈴木 弘茂
" 笹田 義夫
" 辻内 順平
" 酒井 善雄
" 藤本 盛久
" 末武 国弘
" 岸 源也
助教授 海老塚佳衛
" 谷口 汎邦
情報処理センター
長 堀江 久
大学院委員会委員長
向 正夫
教育委員会委員長
谷崎 義衛
研究委員会委員長
白井 隆
施設委員会委員長
向山 光昭
事務局長
齊藤寛治郎

廃棄物等の処理に関する委員会

教授 桂 敬 教授 白井 隆 事務局長
" 龍谷 光三 助教授 水野 俊彦 齊藤寛治郎
" 福富 博 " 久保田 宏 (幹事)
" 益子 正巳 " 大塚 二郎 施設部長
" 須藤 六郎 " 早川 豊彦 片山 恂一

昭和49年度就職幹旋事務

昭和50年3月の卒業見込予定者に対する就職幹旋事

務は、例年どおり国立大学協会等の申し合わせにより次のとおり行なうことになった。

- 就職担当教官が交付する推せん書は7月1日以降とする。
- 就職関係書類（成績証明書、卒業見込証明書、推せん書等）の大学から求人先への発送は10月1日以降とする。なお、就職に使用する諸証明書は10月1日以前には発行しない。
- 採用者側からの求人申込み発表は、教務課および各学科において6月1日一斉に発表する。

なお、昭和49年度の就職担当教官は次のとおりである。

学 科 名	職 名	氏 名	学 科 名	職 名	氏 名
数 学 科	教授	平沢 義一	機械工学科	教授	小川 潔
物 理 学 科	"	市村 浩	生産機械工学科	"	佐藤 和郎
化 学 科	"	須藤 六郎	機械物理工学科	"	白井 英治
応用物理学科	"	栗野 満	制御工学科	"	森 政弘
情報科学科	"	国沢 清典	経営工学科	助教授	野田 淳彦
金属工学科	"	春山 志郎	電気工学科	教授	酒井 善雄
有機材料工学科	"	砺波 宏明	電子工学科		
無機材料工学科	"	加藤 誠軌	電子物理工学科		
化学工学科	"	井上 一郎	土木工学科	"	吉川 秀夫
合成化学科	"	寺沢 誠司	建築学科	"	青木 志郎
高分子工学科	"	加倉井敏夫	社会工学科	"	阿部 統
電気化学科	"	大瀧 仁志			

昭和50年度大学院（修士課程） 入学学内選考始まる

昭和50年度大学院修士課程学内選考は、今春4月から新しく設置された3専攻（材料科学、電子システム、化学環境工学）を含む30専攻のうち、数学専攻を除く29の各専攻について、下記実施要領により実施することになった。

実施要領

- 志望できる者の資格は、昭和50年3月学部卒業予定者全員を有資格者とする。
- 志望できる専攻は、必ずしも所属する学科と対応する専攻に限定しない。
- 志望できる専攻は1専攻とするが、下記の専攻群については1専攻とみなし、併せて志望することができる。
（化学工学系・電子化学・化学環境工学専攻群）
（化学工学系・物理情報工学専攻群）（機械工学・精密機械システム専攻群）（生産機械工学・精密

機械システム専攻群）（機械物理工学・精密機械システム専攻群）（制御工学・精密機械システム専攻群）（制御工学・物理情報工学専攻群）（電気系・物理情報工学・電子システム専攻群）（土木工学・社会開発工学専攻群）（建築学・社会開発工学専攻群）（社会工学・社会開発工学専攻群）

○学内選考によって入学者として内定された者は、一般選考の受験資格はない。また他大学の大学院を受験する場合は、合格を取消す。

なお、健康診断は5月27日（月）保健管理センターで行なわれるが、5月に実施された定期健康診断を受診した者は、改めて受診しなくてもよいことになっている。

願書受付期間の5月27日（月）から29日（水）までの3日間に応募した者に対し、各専攻で6月4日（火）から11日（火）まで選考者を審議することになっており、合格者発表は6月25日（火）教務課専用掲示板に掲示する。なお、合格者には6月28日（金）・29日（土）の両日に、合格通知書を教務課大学院掛で交付する。

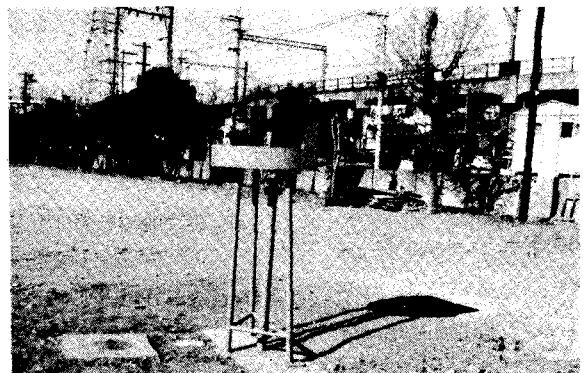
“レインガン” グランドに完成

グラウンドの砂埃を解消しようと、予てからグラウンドの4ヵ所で工事を進めていた大型散水機レインガンが昨年暮れ完成した。

これは毎年砂埃がひどく、教職員・学生共々長年悩まされて来た問題であった。また、グラウンド周辺の住民からも苦情があいつぎ、これまでは事務職員が消火用のホースを用いてグラウンドに放水し、この問題を処理してきたが、真夏には干上がり激しく放水が間に合わぬ状態であった。また事務職員の労働力の問題もあって、予てから散水の機械化が望まれていたものである。

この度の大型散水機レインガンの完成によって、今年から砂埃禍に悩まされることは解消するであろう。このレインガンは圧力8kg/cm²・吐出量1370ℓ/minで散水半径54mあり、グラウンドの4ヵ所に設置されている。

大型散水機
レインガン



“注 目 発 明 ”

—— 科学技術庁より選定を受く ——

このほど、理学部阿部光雄助教授は下記の特許発明について、科学技術庁長官より注目発明の選定をうけ賞状を授与されました。

特 許 番 号：第599151号

発明の名称：耐熱水性および耐薬品性陽イオン交換体の合成法

発 明 者：伊藤卓爾元本学教授（理学部化学）
阿部光雄助教授（理学部一般教育化学）

登 録 期 日：昭和46年 3 月 9 日

選 定 月 日：昭和49年 4 月22日

選定にあたっては、発明奨励審議会の答申に基づき科学技術庁長官が行ない、新聞その他を通じて公表される予定です。

なお、この注目発明は本年で第33回を数え、本学からは昨年の資源研白井隆教授に引き続き本年も選定を受けたもので、このことは特筆されることと考えられます。

弓道部「新道場」落成

このたび大学当局の一方ならぬ御努力により、通称ロマンス坂下のテニスコート脇に新弓道場が完成し、5月25日ささやかながら落成式を挙行いたしました。新道場は射場63㎡、的場28㎡で、現在の諸物価高騰のなかで大変立派なものを建設して頂きました。

本学の弓道部は古く明治中期の東京高等工業学校時代に創立され、戦前まで輝かしい部活動を続けてきましたが、戦後の住宅事情から道場を宿舍（現つばめ寮）に転用され、今日に至りました。そのために弓道部の復活が著しく遅れ、昭和30年代の中頃に現在図書館に勤務されている片岡利正氏の御努力で「同好会」として再発足し、その後「部」に昇格して活動を続け、永らく体育館裏に仮設弓道場を設けて練習をしてきました。この間、戦前から師範を御願いしてきた浦上先生御一門の方々の絶大な御援助と御指導を受け、道場なしで対校試合にも臨み、相当な成績をあげてきました。

現在部員は学部学生約25名、大学院学生約10名で、新道場におりたち、新しい気分で練習に励んでおります。御承知のように、弓道は一般のスポーツと異なり、他の武道と同様に一つの「道」として精神面を重視しております。理工系のきびしい勉学生活の合間に、学生諸君がこの弓を通じて精神の平静を得、また相互の和をうることは、誠にすばらしいことと思います。ぜひ一度新道場を御訪ね下さい。

（弓道部顧問教官 小林靖雄）

練習風景

新道場にて

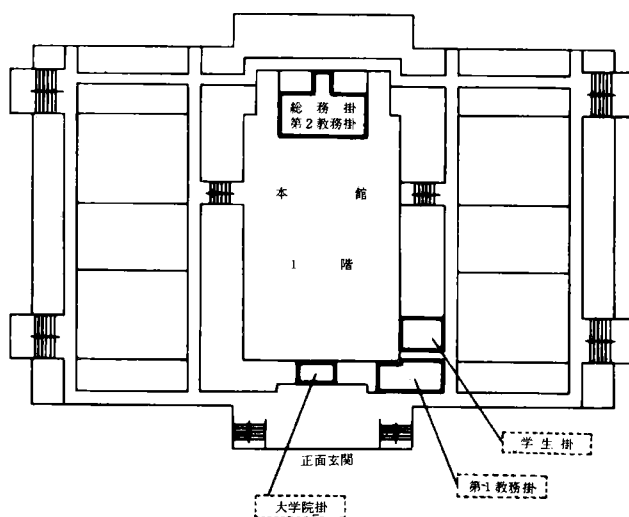


教務課の一部移転

教務課事務室が狭隘なため、かねてよりその改善が望まれていましたが、旧図書館第一閲覧室（本館1階）の内部改装工事完了に伴い、去る4月下旬教務課総務掛および第2教務掛が同閲覧室跡に移転しました。

なお、移転後の教務課各掛の配置は下図のとおりです。

〔配置図〕



（注）内線電話は、従前どおり変更ありません。

東京工大クロニクル No.60

昭和49年 6 月20日

東京工業大学広報室 発行

東京都目黒区大岡山 2-12-1

Tel. (726) 1111 内線 2032